

私の小学生時代、この文章の時代、福島は南部・中部・北部と言う具合に三区画に分けられていた。

従つて、中部に属していた私は、南部や、北部について判らぬ事が多いなあと後悔している。

小倉さんは、確か春本さんと都会で電気の商売だと記憶しているし、次は友人のいた角上の家であつて、秋常さんの先は、青山の菓子店までしか分らない。

この項を書くのに、カメラを持つて一々探訪して歩いたが、青山さんの菓子店の思い出が鮮烈である、それは、昭和四年、私を可愛がつてくれた祖母が亡くなって葬儀の列について行つた時の記憶である。

昔は棺桶を入れた輿を、多く肉親で肩に被いて焼き場まで運ぶのであつた。

多くの人が集まつた、四歳の私は喜んで棺の傍らを着いて行つたらしい、その挙句、青山さんの前の「えんぞ」に落ちてしまった、という事件である。

どぶ泥になつた、私は当然泣き喚いて手にも負えなかつた、その時の記憶が青山さんの前の大きな木の下であつたという事である。

懐かしくて、木の膚を撫でて来たが、七十年以上昔の話である。その木の名前を知らない。

次は「まつろさ」の福益さんの牛乳である。

当時は、病気にでもならなければ、牛乳は貰えない薬であつた。リヤカーを曳いた、福益の「おばば」は実に優しくかつたし、牛乳は何よりも滋養になり風の神を追い払つてくれた。とても当時としては贅沢な、病後の滋養物であつた

後は坂野さんの精米所である。

往來まで埃が来ていた記憶があるので、所謂精米だけではなく、籾摺りからの精米所であつたのだろう。

朝本さんは養鶏であつたと思う。

鶏卵は、当時とても貴重な滋養物で、これも風邪でも引かない限り食べられなかつた。

それから、今でも不思議に思う事は、生卵を食べた後の、殻を植木鉢の中に入れたのは卵殻は肥料になつたのだろうか。

いずれにしても、昔の誰でも慎ましやかで、物を絶対に粗末にせず、儉約を旨として生きてきたと思う。

火葬場のあつた、ら番地を明治末年、蛭川村から、多額の金銭で買戻しているが、どう言う経緯があつたのだろうか。

藩政末年に、福島在所挙げて松ノ木を植え、最も北側の地に火葬場を作つた、これは当時の村づくりの常道であつた。